

信州大学知の森基金を活用したグローバル人材育成のための短期学生海外派遣プログラム
実施状況および成果

プログラム名	「ドイツ環境ゼミ」：環境マインドをもったグローバル人材育成のためのドイツ視察研修プログラム	
学部・研究科名	全学教育機構	
プログラム実施期間	2020年2月15日～3月9日	
研修先(国・都市・施設名)	ドイツ(レーゲンスブルク、ハノーファー他)	
参加学生数	8名	知の森からの支援者数 8名
プログラム概要	2019年11月～2020年2月初旬：事前学習 2020年2月15日：羽田⇒ミュンヘン泊 2月16日：ミュンヘン市内視察⇒レーゲンスブルクへ移動 2月17日～28日：ドイツ語研修(Sprachschule HORIZONTE) 2月29日～3月3日：個人研修(各自で計画し実行) 3月4日～6日：団体研修(ハノーファーに宿泊して) ・4日：市内視察, RIKOH Deutschland ・5日：学校生物センター、ライプニッツ大学ハノーファー、交流会 ・6日：モアスレーベン核廃棄物最終処分場、市民との意見交換会(ブラウンシュヴァイク市) 3月7日：フランクフルトへ移動、市内視察 3月8日～9日：フランクフルト⇒羽田(機内泊)	

実施状況・成果

1) 語学研修(2週間の語学コース)

レーゲンスブルクにあるホリゾンテ語学学校にて2週間のスタンダード・コースに参加。各自の語学能力に合ったクラスに分かれ、実践的なドイツ語運用能力の向上につとめる。期間中は、ホームステイあるいは学校の寮に滞在した。

空き時間や週末は、各自のテーマに従ってレーゲンスブルク市内・近郊や他の都市に足を延ばし、部分的には教員が引率して環境関連施設や博物館などを視察・見学した。

2) 個人研修

各自のテーマに従って出発前に(指導を受けつつ)作成した計画を修正しつつ、各自あるいはグループでドイツ国内を回って視察を行った。

3) 団体研修(ハノーファーを拠点として)

本学の卒業生でもありドイツ在住で主に環境をテーマとしたジャーナリストとして活動している田口理穂氏と、ライプニッツ大学ハノーファーのフランツ・レント教授のサポートによって、ハノーファー市内及び近郊の各所を視察した。訪問したのは次の各所：

3/4: ハノーファー市内の文化・歴史視察, RIKOH Deutschland訪問(日系ドイツ企業における環境への取り組みを視察)

3/5: 学校生物センターとライプニッツ大学ハノーファー訪問(レント教授の講義を含む)、学生や一般市民との交流会

3/6: モアスレーベン核廃棄物最終処分場視察、市民との意見交換会(ブラウンシュヴァイク市)

学生の声①-繊維学部 学生

ドイツ環境ゼミではドイツのエネルギー転換、ドイツの環境教育、ゴミ問題の3つの視点からドイツの環境に対する意識を見ることができました。メンバーの一人一人は強い環境意識を持っており、お互いのテーマについて話し合い、実際に足を運んだ体験を共有することで、より多角的な面から環境問題解決の糸口を探ることができました。

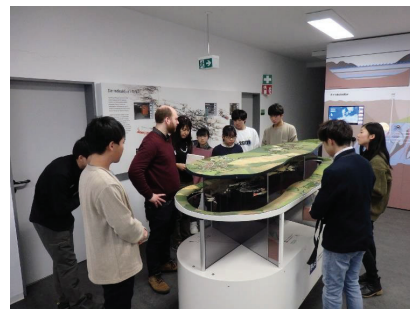
また、幸か不幸か私たちはコロナの過渡期に直面していました。ドイツに降り立った時はコロナに関するニュースはそれほど多くはありませんでしたが、日に日に状況が悪化し、未知のウイルスに対する不安が出始めている頃でした。ほとんどのドイツ人は私たちが歓迎してくれましたが、当時中国で爆発的な感染が起こっていたことから、中には私に対して『コロナウイルス』と通りすがりに声をかけられることもありました。その時は松岡先生が心の傷にも対応してくださり、結果的にはドイツに行ったからこそ体験できた思い出となりました。

ドイツでの環境視察は、新たな視点、価値観を得ることができた貴重な3週間でした。

学生の声②-理学部 学生

ドイツ環境ゼミでは、主にドイツの人々の視点に立って物事を考えることを学んだ。まず、語学学校の授業では、コミュニケーションを重視する形式が取られていた。これは、日本の大学で受ける外国語の授業の形式と非常に異なっていると感じた。環境視察では、自分のテーマを立てて、目的を達成するために、他人の意見を聞きながら、自分で多くのことを深く考えて様々な発見をする力をつけることができたと思う。国境を越えて色々な人々と意見を交わすことで、環境問題に対して日本や自分と違う視点から考え、解決方法を考えることができた。さらに、約3週間、ゼミの先生や仲間との絆を深めることができた。この研修で、かけがえのない経験をすることができ、さらにこの経験が、今では新たな挑戦をするための励みとなっている。

モアスレーベン核廃棄物最終処分場の視察



語学学校の教室にて

